

Partners Action

すべて業界専門団体である日本洋傘振興協議会の厳しい基準をクリアした傘骨を使用しています。さらに基準値よりも0.1ミリ太い中柱を採用することによって傘として強靱な体幹ゆえの壊れにくさを実現しています。

特長③：傘骨はすべて「JUPA基準」をクリア

持ち手の素材は天然木にこだわり、素材の特徴、個性を最大限に生かした加工を施しています。唯一無二の質感は、傘に対する愛着を高めています。

特長②：手元には自然木を採用

甲州織は山梨県の富士吉田市を中心とした郡内地域で作られる、江戸時代から愛される400年以上の歴史を誇る織物です。艶感がありしなやかで、発色性に優れたこの生地を使用しています。

特長①：傘生地は甲州織を使用

市原のオリジナルブランドである「Ramuda(ラムダ)」。この言葉にはラテン語などに由来する「永遠」の意味が込められており、「長く愛用される傘」を提供し続ける姿勢を表現しています。

オリジナルブランド「Ramuda」

技術を次世代へ継承することも重要な使命と位置づけています。SDGs目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」の観点から、業界で初めて傘づくりのテキストを作成し、暗黙知だった技を言語化・数値化しました。経験のない人でも関心が

技と心を次世代へ

増加している海外旅行客数が象徴するような最近の日本ブームもあり、日本の伝統や文化に興味を持たれる海外の人も多くいます。「日本の傘の機能性や品質が良さ」という安心感から海外の方の購入が増えている傾向とのこと。市原としても海外展示会の出展や海外企業とのOEM受託など海外への発信に力を入れていきます。海外に向けて発信することは、世界中で「物を末永く使用する価値」を広める役割を担っています。

海外に向けても価値発信

増加している海外旅行客数が象徴するような最近の日本ブームもあり、日本の伝統や文化に興味を持たれる海外の人も多くいます。「日本の傘の機能性や品質が良さ」という安心感から海外の方の購入が増えている傾向とのこと。市原としても海外展示会の出展や海外企業とのOEM受託など海外への発信に力を入れていきます。海外に向けて発信することは、世界中で「物を末永く使用する価値」を広める役割を担っています。

海外に向けても価値発信



Ramudaでは伝統のスタイルに独自の色や柄を組み合わせる。

市原の傘は、使い捨ての器ではなく、代々受け継がれる漆器のような存在だととえることができます。たとえ壊れたとしても丁寧に直し、手入れを重ねるほどに愛着と価値が増していく。そのプロセス自体が、環境を守り、技術をつなぎ、人の心を豊かにする営みだといえます。一本の傘に込められた精神と伝統技術の力が、これからの持続可能な社会づくりに貢献していくでしょう。

傘がもたらす心の豊かさ

市原の傘は、使い捨ての器ではなく、代々受け継がれる漆器のような存在だととえることができます。たとえ壊れたとしても丁寧に直し、手入れを重ねるほどに愛着と価値が増していく。そのプロセス自体が、環境を守り、技術をつなぎ、人の心を豊かにする営みだといえます。一本の傘に込められた精神と伝統技術の力が、これからの持続可能な社会づくりに貢献していくでしょう。



「傘職人養成講座」の開催風景

あれば学べる仕組みを整え、「傘職人養成講座」を通じて新たな担い手の育成に力を入れていきます。また、子どもや学生や海外からの顧客(インバウンド)を対象とした工房見学や傘づくり体験を通じて伝統工芸の魅力と「物を大切に作る心」を伝えていきます。加えて、デザイン不良などで市場に出ない傘を福祉施設や学校へ寄付する企画があります。これは資源の有効活用と社会貢献を両立させる取り組みです。



長寿命設計と徹底したアフターケア

「雨をしのぐ道具」ではなく、「雨の日は待ち遠しくなるようなパートナー」として末永く使える高品質な傘づくりを使命としている市原

良いものに愛着を持ち、末永く。

日本では年間約1.3億本の傘が消費され、その約8000万本がビニール傘だといわれています。※1。その使用量は世界一ともいわれますが、ビニール傘は多素材で分解しにくくリサイクルが難しいため、ほとんどが埋め立て処分され、その環境への負荷も非常に大きいといえます。また、遺失物取扱状況※2を見ても、傘の忘れ物は年間30万本以上が遺失物センターに届いていますが、遺失者返還の割合も0.9%と低く、大事に使われていないことが窺われます。そのような傘を取り巻く状況に、「伝統の技術」と「物を大切に使う」という価値観をもって変革にチャレンジしているのが株式会社市原(以下、市原)です。

市原の取り組みの背景には、日本の伝統的な「もったいない」精神があります。江戸時代の暮らしは徹底したリサイクル文化が根付いていました。傷んだご飯をお菓子に変える、不要な器物を漬物に使う、着物は修繕を繰り返しながら最後まで使い切るなど、生活の隅々に「直して使う」知恵が息づいていました。その支えとなっていたのが、ものづくりに決して手を抜かない職人気質です。正直に正しいものを作る気質と、高い修理技術があったからこそ物は命を延ばされてきました。市原が継承しようとしているのは、まさにこの精神です。

※1：(参考) 日本洋傘振興協会 <https://www.jupa.gr.jp/pages/faq>

※2：(参考) 警視庁「遺失物取扱状況(令和6年中)」

原。1946年創業の同社が掲げて推進しているテーマは、「高品質な傘を生み出し、仮に壊れたとしても修理を重ねながら大切に使う」という価値観を広げていくことです。一度購入した傘は、パーツがある限り何度でも職人が修理。この姿勢は、SDGs目標12「つくる責任、つかう責任」の実践そのものです。大量生産・大量廃棄のサイクルから一歩距離を置き、長寿命の製品設計とアフターケアを前提にした製品を提供することで、資源の消費を抑え、気候変動への負荷も減らしているのです。

活かされているリサイクルの知恵



<参考>市原の傘づくりギャラリー

デザイン性の高い生地を熟練の技でカットニング。



製造で一番大事な木型づくり。傘のスタイルを決める。



工房内で職人が一つひとつ丁寧に作りこむ。



ジェイスパートナーズメッセージ

Message

◆「つくる責任・つかう責任」の実践と次世代への継承

いつも当社製品をご愛顧くださり、誠に有難うございます。この度、SDGs 認証をいただきました。今までの当社の取り組みが評価されたものと、大変喜ばしく思います。これからも、変わらない製品づくりを続けていくと共に、近隣の小学校・幼稚園への傘の寄付や、自社傘工房の見学・体験を通じて職人技と環境配慮の大切さを伝え続けていければと考えています。また、職人が一本一本丁寧に仕立てた傘を届けることで「つくる責任・つかう責任」の実践と次世代への継承も併せて目指してまいります。



2025年10月、市原はJACEより「SDGs活動認証」を受けました。写真は授賞式のもの。

株式会社市原
代表 奥田正子さん(中央)
市原のスタッフの皆さま

株式会社市原について

Company

- 住所：〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町 2-17-9
- 創業：1946年
- 設立：1949年
- 事業内容：傘企画製造卸・服飾総合雑貨企画製造卸・OEMなど
- 取扱品：傘・革製品全般・サスペンダーなどファッション雑貨全般

<https://ichihara-1946.com/>



「伝統工芸士東京洋傘職人」である奥田代表(左)と林康明さん(右)